

読みを深めるための推論発問の効果

森 暢 子

1. はじめに

文を深く読むと、表面的な理解だけでは得られないような読みの面白みを感じることができる。それでは、深い読みを促すためには何が必要なのだろうか。

今回は推論発問に注目した。推論発問には深い読みを促す効果があると仮定し、大学生を被験者として調査を行った。調査は、理解度に焦点を当てるため、質問も回答も日本語を使用した。英語だと、質問文の理解や英作文の能力が影響してしまうからである。調査から得られた回答を比較し、その結果から推論発問の効果について述べることにする。

この論文の進め方は、まず、深い読みとはどういうものかについて述べ、次に、深い読みを促す理想的な推論発問について述べる。そのあとに、調査内容と調査結果を提示する。最後に、調査結果から、推論発問が深い読みを促すのに効果的であることを示す。

2. 深く読む

読解過程については、言語学の分野だけでなく心理学の分野でも研究されている。また、熟達した読みや深い読みについてもでそうある。この深い読みを成立させるには、言語能力だけでなく背景知識も必要だ、ということは両分野において提唱されている。そこで、まず背景知識の重要性について説明し、次に深い読みにとって重要な主題の把握とモニタリングについて説明する。最後に、今回の調査にも使用した物語文というジャンルの読みについて説明を加える。

2.1 背景知識

読解には言語能力だけでなく背景知識も必要である。背景知識の重要性については、金谷が次のように述べている。

読解過程では、テキストからの文字情報を解読する言語処理過程と、読み手が言語知識以外の背景知識や認知能力を使って文字情報処理過程を監視し、それらの文字情報の読解に関する知識を既存の背景知識の中から検索し、照らし合わせながらテキスト理解を進めていく認知過程といった2つのプロセスが常に相互作用し合っていると言われていいる。(金谷, 1995)

また、スキーマ理論においても背景知識の重要性が述べられている。

スキーマ理論は「読解 (reading comprehension) の研究」にも影響を与えてきたが、Carrel & Eisterhold (1983) は、「スキーマ理論によれば、読解は読み手の背景的知識とテキストから得られる情報の相互作用を意味する」と述べられている。つまり、スキーマ理論は、「読解」

を、「読み手の様々な背景的知識（スキーマ）とテキストからの文字情報とが相互に関わりながら進められていくもので、どちらか一方の情報だけでは成立しないもの」ととらえている。（林, 2000, pp. 201-202）

読みを深めるためには、読み物に関連する背景知識を活性化させることが必要になってくる。特に、文学作品のような想像力を要求する読み物を理解するには多くの背景知識が必要であろう。背景知識の質と量は文章の理解度を左右するものである。

2.2 主題の読み取り

心理学者たちは、読解過程の最終段階では主題を把握する作業を行うと考えている。この段階を「テキスト・モデリング」と呼び、次のように説明している。

次のテキスト・モデリング（text modeling）の過程では、読み手は個々の文の中に含まれる情報を統合し、関連づけて、文章全体の心的表象を作る。読みの最終段階であるテキスト・モデリングの産出結果は、文章全体の意味の心的表象や、その“主題（gist）”であり、読み手が長期記憶の中に貯蔵していくものである。読み手は紙面から新しい情報を取り込みながら、文章のモデルを次々と修正して、更新し、そして主題を蓄えていく。（J. T. Bruer, 1993, 松田他監訳, p. 158）

いったん主題を読み取ったあとその主題が的確に把握できているかどうかを確認することは、深く読むためには重要な作業である。この作業はモニタリングと言い、次のように説明されている。

曖昧な点が出てきたり、論旨に問題や矛盾が生じた場合には、熟達した読み手は自分の理解が誤っていることに気づき、問題点を探してそれを解決しようとする。熟達した読み手は読解の過程をモニタしているのである。(J. T. Bruer, 1993, 松田他監訳, p. 160)

的確に主題を把握できたかどうか確認する作業は、同時に、読みを深めていく作業でもある。従って、モニタリングは深い読みを促すのに重要な役割を果たしていると言える。

2.3 文学を味わう

今回の調査では物語文を扱った。そこで、物語文の読みの特徴を次を示す。

テキストが詳細であるかどうかは問題なのではなく、結果的に読み手のなかに作り上げられる情景なり、登場人物像なりが詳しく細やかであることが文学の読みにおいて重要であると考えべきであろう。読み手が細かい点まで行き届いた解釈を作り上げるためには、テキスト中に詳しく明示された情報ばかりでなく、いわゆる「行間」という空白もまた何かが欠落し隠されているという情報として役立てられるのであり、これが「丹念に読んでいく」ことの中身なのである。

こうして読み手は、時代背景や季節感などの「とき」、風景や場面転換などの「ところ」を生き生きと想像し、登場人物の性格・心情や相互関係をつかみ、寓意や作者のねらい、ときには人生観などを含めた詳細で奥深い解釈を構成するのである。(村田, 2001, p. 191)

行間を読んだり登場人物の心情を想像したりするには、文字から得られる情報と自分のもっている背景知識を用いて「推測すること」が要求

される。この「推測」を促進するものの1つが「推論発問」だと考えられる。次はこの「推論発問」について述べる。

3. 深い読みを促す推論発問

物語文を正しく理解し的確に主題を把握するためには、行間を読みながら読解を進めていかなければならない。この作業には精緻化推論が必要となる。この精緻化推論を促すにはどのような発問がいいのだろうか。まず、精緻化推論について説明し、次にどんな推論発問がいいのかについて述べていく。

3.1 精緻化推論

読解における精緻化推論とその重要性については田中が次のように説明している。

命題と命題をつなぐ一貫した意味的なつながりの推論は、精緻化推論 (elaborative inference) と呼ばれる。(田中, 2009, p. 160)

センテンス1つ1つの意味が理解できたとしても、文章の一貫したメッセージを捉える状況モデルが、読者の頭の中に構築されていなければ、そのテキストを理解できたとはいえない。文章全体を一貫したメッセージとして理解してこそ、真の意味での読みの行為になるものと考えられる。そのためには、リーディング指導において、精緻化推論を含む多様なレベルの発問で生徒の読みを促すことが大切で、豊かな読解力を育成する上で欠かせないものと思われる。(田中, 2009, p. 161)

このような精緻化推論を促すためにはどういう発問がいいのだろうか。次に、よい推論発問の特徴について述べる。

3.2 よい推論発問の特徴

推論発問を作成するには、まず、物語文を読み進めていくときの理解すべきポイントについて確認しておく必要がある。このことについては田中が次のように述べている。

読みのポイント：

一連の出来事における登場人物の行動や心情を理解し、一貫した主題を読み取る。

理解すべき内容の例：

- a. 登場人物は誰か？
- b. どのような場面なのか？
- c. どのような出来事が展開しているか？
- d. 人物の心情はどう変化しているか？
- e. 物語の背景にある主題は何か？（田中, 2009, p. 125）

次に、物語文の読みを深めるための発問はどのようなものかについて見ていく。まず田中の説明を見てみよう。

テキストから推測させる発問の例：

- a. 登場人物や筆者の意図を推測させる
- b. テキストの主題を推測させる
- c. 登場人物や筆者の心情を推測させる
- d. その後どう展開するのかを推測させる
- e. 会話の内容を具体的に推測させる

f. その状況に関して推測させる (田中, 2009, p. 140)

物語文の読解で重要な行間読みを促す発問については池野が次のように説明している。

推論を促す発問 (inferential questions, interpretation) とは、いわゆる読者の「行間読み」を助けるための読解発問である。

- (a) 見逃してしまう可能性のある言い換え表現を問うもの
- (b) ディスコース・マーカーで明示的に示されていない論説関係 (coherence relations) に目をむけさせるもの
- (c) テキストで観察される行為の動機や原因を推測させるもの
- (d) テキストの情報を基に登場人物の性格を判断させるもの

推論発問は、「その推論を促すことで学習者の読みが深まるかどうか」、「学習者がよりテキストと格闘することになるかどうか」を考え合わせて作成することが重要である。(池野, 2000, pp. 74-75)

推論発問は物語文を深く読むことを促すのに実際に効果があるかどうかを検証するため、今回大学生を対象に調査を行った。次はその調査について述べていく。

4. 推論発問を用いた調査

物語文を理解し深く読んでいくには推論発問は効果的なのだろうか。このことを検証するために、大学1年生と2年生を対象に記述式の調査を行った。回答は日本語で書いてもらった。どのような調査なのかをこれから説明していく。

4.1 仮説

1つの物語を読む。読後、事実を確認する発問のみに回答した学生よりも事実を確認する発問と推論発問の両方に回答した学生の方が主題を的確に把握することができる。従って、深い読みができていくことになる。

4.2 調査方法

調査は次のように行った。被験者は大学1年生と2年生で、それぞれの学年を高いレベルと低いレベルに分ける。レベルは被験者の中での相対的なものである。

人数は下記のようなものである。

大学1年生140名＝低いレベル61名＋高いレベル79名

大学2年生101名＝低いレベル30名＋高いレベル71名

全員同じ物語を読み、物語中の事実を確認する発問に回答するグループと事実を確認する発問と推論発問の両方に回答するグループに分ける。どちらのグループも発問回答後に物語の主題を書く。主題をどれだけの確に把握できているかを比較することにより、推論発問の効果を明らかにする。調査紙は2種類あり、事実確認発問のみに回答し主題を書くものを調査紙A、事実確認発問と推論発問に回答し主題を書くものを調査紙Bとする。発問については次の4.3で具体的に説明する。

グループは次の8つを作った。

- ① 1年低いレベル調査紙Aに回答 (29名) = 〈1・低・A〉
- ② 1年低いレベル調査紙Bに回答 (32名) = 〈1・低・B〉
- ③ 1年高いレベル調査紙Aに回答 (35名) = 〈1・高・A〉
- ④ 1年高いレベル調査紙Bに回答 (44名) = 〈1・高・B〉
- ⑤ 2年低いレベル調査紙Aに回答 (13名) = 〈2・低・A〉
- ⑥ 2年低いレベル調査紙Bに回答 (17名) = 〈2・低・B〉

⑦ 2 年高いレベル調査紙 A に回答 (36 名) = $\langle 2 \cdot \text{高} \cdot A \rangle$

⑧ 2 年高いレベル調査紙 B に回答 (35 名) = $\langle 2 \cdot \text{高} \cdot B \rangle$

比較は 8 つ行う。グループの組み合わせと目的は何なのかを以下に示す。

- 1) ① $\langle 1 \cdot \text{低} \cdot A \rangle$ と ② $\langle 1 \cdot \text{低} \cdot B \rangle$: 低いレベルでの推論発問の効果を見る
- 2) ③ $\langle 1 \cdot \text{高} \cdot A \rangle$ と ④ $\langle 1 \cdot \text{高} \cdot B \rangle$: 高いレベルでの推論発問の効果を見る
- 3) ⑤ $\langle 2 \cdot \text{低} \cdot A \rangle$ と ⑥ $\langle 2 \cdot \text{低} \cdot B \rangle$: 低いレベルでの推論発問の効果を見る
- 4) ⑦ $\langle 2 \cdot \text{高} \cdot A \rangle$ と ⑧ $\langle 2 \cdot \text{高} \cdot B \rangle$: 高いレベルでの推論発問の効果を見る
- 5) ② $\langle 1 \cdot \text{低} \cdot B \rangle$ と ④ $\langle 1 \cdot \text{高} \cdot B \rangle$: レベルの違いが推論発問にもたらす効果を見る
- 6) ⑥ $\langle 2 \cdot \text{低} \cdot B \rangle$ と ⑧ $\langle 2 \cdot \text{高} \cdot B \rangle$: レベルの違いが推論発問にもたらす効果を見る
- 7) ② $\langle 1 \cdot \text{低} \cdot B \rangle$ と ⑥ $\langle 2 \cdot \text{低} \cdot B \rangle$: 学年の違いが推論発問にもたらす効果を見る
- 8) ④ $\langle 1 \cdot \text{高} \cdot B \rangle$ と ⑧ $\langle 2 \cdot \text{高} \cdot B \rangle$: 学年の違いが推論発問にもたらす効果を見る

8 種類の比較の結果から、どのような場合に推論発問が効果的なのかを分析していく。

4.3 物語のあらすじと発問

今回調査に使用した物語は ‘I Have Never Seen You Before’ (“Orbit English Reading”, 三省堂) で、金庫破りの物語文である。

物語のあらすじは次のようである。Jimmy Valentine は金庫破りの罪で

服役していた。その刑期が終わり出所するとき看守に「おまえは根はいい奴なのだから金庫破りはやめていい人生を送りなさい」と言われた。しかしそれにもかかわらず再度金庫破りをしてしまう。その後 Elmore という町に移り、そこで美しい女性に恋する。Jimmy はこの町に住むことにし靴屋を始め名前を Ralph D. Spenser に変える。Ralph はその美しい女性 Annabel と相思相愛になり婚約する。そしてもう二度と金庫破りはしないと心に誓う。Annabel の父親は Elmore Bank のオーナーで、金庫はタイマーでロックされる最新式のものだった。この最新式の金庫を町のみんなに公開しているとき、Annabel の姪の Agatha があやまって金庫の中に閉じ込められてしまう。はやく助け出さないと金庫の中の酸素がなくなり Agatha が死んでしまう。しかしタイマーロックされてるので誰にも開けられない。Annabel は Ralph に「何とかして」と懇願する。Ralph は深いため息をついたあと金庫破りの道具を家から持ってくる。そしてみんなのしている前で金庫を開け Agatha を助け出す。その場には警察官も居合わせた。Ralph はその警察官のところに行き「私を連行して下さい」と言う。しかし警察官は「君に会ったことはない」と言ってその場を立ち去る。

調査紙は、事実確認発問（問 1～8）に回答し主題を書く〈調査紙 A〉と、事実確認発問（問 1～8）と推論発問（問 9～14）に回答し主題を書く〈調査紙 B〉の 2 種類である。

〈調査紙 A〉

■次の問いに日本語で答えて下さい。

- 問 1 ジミーはなぜ刑務所に入っていましたか？
- 問 2 ジミーがエルモアの町に住もうと決めた理由は何でしょうか？
- 問 3 ジミーがアナベルと婚約した後、どういう決心をしたのでしょうか？

問4 エルモア銀行の金庫は何によってコントロールされていま
したか？

問5 エルモア銀行の金庫でどのような出来事が起きましたか？

問6 アナベルはラルフ（＝ジミー）に何を訴えましたか？

問7 ジミーはアナベルの訴えに対しどのような行動をとりましたか？

問8 警察官はジミーの行動にどのような態度を示しましたか？

■次の質問に答えてください。

(1) この物語文を以前に読んだことがある。(はい いいえ)

(2) この物語文の内容は面白かった。

全く思わない 強く思う

(1 - 2 - 3 - 4 - 5)

(3) この物語文に登場する人物の気持ちに共感した。

全く思わない 強く思う

(1 - 2 - 3 - 4 - 5)

(4) ジミーが人助けをする決心のできた背景には何があると思いま
すか。自由に答えてください。

(5) この物語文の背後にある主題（＝筆者が読者に伝えようとしてい
るもの）は何だと思えますか。自由に答えてください。

〈調査紙B〉

■次の問いに日本語で答えて下さい。

問1～8 は調査紙Aと同じである。

問9 ジミーが刑務所から出たとき、ジミーはどのようなことを考
えていたと思えますか？

問10 ジミーの靴屋はなぜうまくいったと思えますか？

問11 アナベルはどのような気持ちでジミーに助けを求めたと思
いますか？

- 問12 ジミーが“took a deep breath and suddenly stood up”という動作をしたとき、ジミーは心の中でどのようなことを考えたと思いますか？
- 問13 警官はなぜジミーに対し、“I have never seen you before.”と言ったと思いますか？
- 問14 ジミーに対する警官の行動に、ジミーはどのようなことを感じたと思いますか？

■次の質問に答えてください。

(1)～(5)は調査紙Aと同じである。

問1～8は事実確認発問で、回答は本文の中に明記されている。従って推測する必要はない。問9～14は推論発問で、回答するには推測する必要がある。問9、11～14は登場人物の心情や性格等を推測させる発問である。問10は登場人物の能力、性格、人間関係等を推測させる発問である。これらの推論発問が物語の主題を把握するのにどのように効果的なのか、その関連を次でみていく。

5. 調査結果とその分析

推論発問に回答しないときと回答したときでは、主題の把握にどのような違いがみられるのだろうか。まず各グループでよく書かれていた主題をあげ、そのあと4.2で示した8つの比較を行う。

5.1 回答された主題

2つの調査紙の最後にある発問「(5) この物語文の背後にある主題（＝筆者が読者に伝えようとしているもの）は何だと思いますか。」に対す

る回答をあげていく。() 内の数字は回答数である。

① 〈1・低・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 能力や技術は使い次第で良くも悪くもなる。(3)
- 3) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(1)
- 4) 恋愛は人を変える力がある。(1)
- 5) 大事な何かが出来た時自分がリスクを負ってでもそれを守ろうとする人間のすごさ。(1)
- 6) 過去の罪は人や物を守った時に薄れていく。(1)
- 7) 良いことをすればそれ相応のことがかえってくる。(1)
- 8) 人の心の温かさ。(1)
- 9) 良い方向に、人のためになる方向に物事を考えてほしい。(1)

② 〈1・低・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 能力や技術は使い次第で良くも悪くもなる。(5)
- 3) 過去と現在は別物。(3)
- 4) 人との出会いや信頼関係の大切さ。(2)
- 5) 人は人に救われる。それは循環する。(2)
- 6) 人は支え合いながら生きている。(1)
- 7) 大切な人のために行動を起こす。(1)
- 8) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(1)
- 9) 誠意は伝わる。(1)

③ 〈1・高・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(12)
- 2) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(5)
- 3) 人との出会いや信頼関係の大切さ。(2)
- 4) 能力や技術は使い次第で良くも悪くもなる。(2)

- 5) 人の優しさ。(2)
- 6) 悪事を働いた人でも完全な悪人ばかりとは限らない。(2)
- 7) 自分の決意を曲げてもしなければならぬ時がある。(2)
- 8) 人の命を助けなければいけない。(2)
- 9) 自分が変われば周りの人の見方も変わる。(1)
- 10) 誠意ある行動は人の心を動かす。(1)
- 11) 大切な人のために全力を尽くせ。(1)
- 12) 罪を受け入れちゃんとした生活を送ってほしい。(1)

④ 〈1・高・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(14)
- 2) 能力や技術は使い次第で良くも悪くもなる。(8)
- 3) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(3)
- 4) 悪事を働いた人でも完全な悪人ばかりとは限らない。(2)
- 5) 良いことをすればそれ相応のことがかえってくる。(2)
- 6) 真面目に生きていれば周りはわかってくれる。(2)
- 7) 罪を償って良いことをしてほしい。(1)
- 8) 誰もが良い面と悪い面をもっている。(1)
- 9) 過去と現在は別物。(1)
- 10) 人との出会いや信頼関係の大切さ。(1)
- 11) 固定観念に固執してはいけない。(1)

⑤ 〈2・低・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 能力や技術は使い次第で良くも悪くもなる。(3)
- 3) 罪は償える。(2)
- 4) 自分が変われば周りの人の見方も変わる。(1)
- 5) 出会う人によって人生は左右される。(1)
- 6) 良いことをすればそれ相応のことがかえってくる。(1)

7) 人命の大切さ。(1)

⑥ 〈2・低・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(3)
- 2) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(3)
- 3) 恋愛は人を変える力がある。(3)
- 4) 能力や技術は使い方次第で良くも悪くもなる。(1)
- 5) 罪を償うのは自分だ。自己責任。(1)

⑦ 〈2・高・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(14)
- 2) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(4)
- 3) 能力や技術は使い方次第で良くも悪くもなる。(4)
- 4) 大切な人のためには改心したり行動を起こしたりできる。(4)
- 5) 罪は償える。(1)
- 6) 失敗してもはいあがれ。(1)
- 7) 悪事を働いた人でも完全な悪人ばかりとは限らない。(1)

⑧ 〈2・高・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 悪いことをする人でも人助けをするような優しさをもっている。
(3)
- 3) 一見悪人に見えても実はそうでない人もいる。(2)
- 4) 自分の犯した罪への償い、罪滅ぼし。(2)
- 5) 守るものができた時の人の強さ。(1)
- 6) 人命の大切さ。(1)
- 7) 人を思いやる優しさは人に伝わり共感してくれる。(1)
- 8) 悪いことをした人でも、自分でやめ、人助けをして、周りの人々に認められる。(1)

5.2 回答された主題の比較

次に、学生が回答した主題の比較を4.2で示したものに從って行う。

- 1) ① 〈1・低・A〉と② 〈1・低・B〉：低いレベルでの推論発問の効果
をみる

推論発問に回答したグループの方が、人と人のつながりを述べるものが多い。これは、問11、12、14で、相手に対する気持ちを考えて回答したからだと考えられる。

- 2) ③ 〈1・高・A〉と④ 〈1・高・B〉：高いレベルでの推論発問の効果
をみる

2つのグループの間にあまり違いは見られない。従って、推論発問の効果はみられないことになる。

- 3) ⑤ 〈2・低・A〉と⑥ 〈2・低・B〉：低いレベルでの推論発問の効果
をみる

推論発問に回答したグループの方に、自己責任を述べたものがある。これは、問12で、ジミーは過去の罪を償いたかったのではないかと推測したからだと考えられる。

- 4) ⑦ 〈2・高・A〉と⑧ 〈2・高・B〉：高いレベルでの推論発問の効果
をみる

2つのグループの間にあまり違いは見られない。従って、推論発問の効果はみられないことになる。

- 5) ② 〈1・低・B〉と④ 〈1・高・B〉：レベルの違いが推論発問にもたらす効果をみる

レベルの高いグループの方には、誰もが良い面と悪い面をもっている、という回答があるので、人や物を複眼的、多面的に捉えているようである。これは、問9、12で、ジミーの心の変化を認識したからではないかと考えられる。

- 6) ⑥ 〈2・低・B〉と⑧ 〈2・高・B〉：レベルの違いが推論発問にもた

らす効果をみる

レベルの高いグループの方には、根っからの悪人ばかりではない、という回答があるので、人や物を複眼的、多面的に捉えているようである。これは、問9、12で、ジミーの心の変化を認識したからではないかと考えられる。

7) ②〈1・低・B〉と⑥〈2・低・B〉：学年の違いが推論発問にもたらす効果をみる

1年生では、人と人のつながりに注目する回答があり、2年生では、自己責任に注目する回答がある。これは、2年生の方は、問12に、より高い認識があるからではないかと考えられる。

8) ④〈1・高・B〉と⑧〈2・高・B〉：学年の違いが推論発問にもたらす効果をみる

2年生では、人が強くなれる理由に注目している。これは、多くの発問を通して、総合的に物事を捉えているからではないかと考えられる。

以上のことをまとめると以下の3つのことが言える。

- 1) 登場人物の心の中を推測する発問を解くことによって、人や物を複眼的、多面的に捉えるように促される。そして、物語をより深く理解し主題を見つけていくようになる。
- 2) レベルの低い読み手の方が推論発問の効果がみられる。レベルの高い読み手は、元々自分の力で深く読み主題を見つけることができるのではないかと考えられる。
- 3) 1年生より2年生の方が、物語を複眼的、多面的に捉える傾向にある。人生経験の量や種類が多いことと、精神的成熟度が高くなっていることがその要因ではないかと考えられる。つまり、背景知識が豊富なのである。推論発問は、背景知識を活性化させる効果があるので、人生経験がより豊かな者の方に、より深くより視野の広い読みをもたらしと考えられる。

1)～3)から、4.1で立てた仮説は支持されたということになる。

6. 結 論

今回、物語文を深く読むためには推論発問が効果的である、という仮説に基づいて調査を行った。その結果から、読み手に関しては、読解レベルの低い読み手や背景知識の豊富な読み手に効果があることがわかった。また、読解作業に関しては、登場人物の性格や行動様式、人間関係、出来事の因果関係などを複眼的、多面的に捉えるのに効果的であることもわかった。事実確認発問だけでは深く豊かな読みを促すには不十分なようである。

どういうジャンルの文を読むかによって読みのポイントは異なる。従って、よい推論発問を作成するには、それぞれの理解ポイントをおさえ、さらにどんな背景知識を活性化させればいいのか考慮する必要がある。この点に留意して作成された推論発問を用いれば、深い読みを促すことができ、人生の教訓までも得る可能性が生じてくるであろう。

推論発問は、読み手を本当の読解の面白みに導く力をもっているのだ。

引用文献

- Bruer, J. T. (1993) "Schools for thought: a science of learning in the classroom." The MIT Press. [松田文子・森敏昭（監訳）（1997）『授業が変わる——認知心理学と教育実践が手を結ぶとき』158, 160頁 京都：北大路書房]
- Carrel, P. L. and Eisterhold, J. C. (1983) 'Schema theory and ESL reading pedagogy,' "TESOL Quarterly 17, 4": 553-573.
- 林伸昭（2000）「第Ⅱ部 2. スキーマを活性化させるリーディング指導」高梨庸雄・卯城祐司（編）『英語リーディング事典』201-202頁 東京：研究

社出版

池野修 (2000) 「第 I 部第 6 章 読解発問」高梨庸雄・卯城祐司 (編) 『英語リーディング事典』74-75 頁 東京: 研究社出版

金谷憲 (1995) 『英語リーディング論——読解力・読解指導を科学する』河源社

村田夏子 (2001) 「13 章 文学を味わう」大村彰道・秋田喜代美 (監修) 『文章理解の心理学——認知、発達、教育の広がりの中で』191 頁 京都: 北大路書房

田中武夫・田中知聡 (2009) 『英語教師のための発問テクニック——英語授業を活性化させるリーディング指導』125, 140, 160-161 頁 東京: 大修館書店

